

知覚の現前性は知覚的か

佐藤 亮司
モナシュ大学

知覚的現前 (perceptual presence) は Alva Noë の諸著作によって有名になった概念であり、彼の知覚理論を支持する証拠の一つであるとされた。Noë は知覚的現前の様々な事例を用いるが、典型的な例の一つは対象の背面の知覚である。例えばテーブルの上のマグカップを見るという知覚経験を考えよう。Noë によればこのようなときに我々は、マグカップの前面の色や形を知覚しているだけではなく、我々から見えないう背面の色や形もある意味では知覚しているのである。しかしながら、知覚的現前が実際に「知覚的な」現象であるかについてはしばしば疑問がもたれてきた。例えば Prinz は以下のように述べて、対象の裏側が何らかの形で表象されていたとしてもそれは知覚ではないと論じる。「マグカップを見るときに、どれだけ試しても、私には遮蔽された側面は見えない。それは、私の体内の内臓や月の暗黒面のように私には見えないのである。」(Prinz 2012, 76) このような知覚的現前に懐疑的な論者が言うように、対象の前面の知覚と背面の知覚には少なくとも重要な違いがあるように思われる。例えば、対象の実際の色や形が見えているのは前面だけなのである。

本発表で私は、知覚的現前が知覚的かどうかという問題にとりくむ。具体的には、この問題への Bence Nanay の議論をたたき台にし、その批判を通じてこの問題に答えていきたい。Nanay は知覚的現前の一つの事例であるアモーダル知覚を例にとって、遮蔽された輪郭がどのような仕方で表象されているかを議論する。彼は、知覚や信念といった諸候補の検討を通じて、それは知覚ではなくむしろ想像なのだと結論する。しかし、彼の論証は素朴心理学的な心的状態の理解におおむね基づいている一方で、アモーダル知覚を想像として捉えることは当の素朴心理学的な想像の理解から大きく離れてしまうという欠点がある。また、これまでの知覚的現前の議論ではしばしば二種類の表象しか指摘されてこなかったが、知覚的現前には、実際には三種類の表象が関わっていると考えられる。それは対象の前面についての表象、対象の背面についての表象、そして対象全体の表象の三つである。Nanay の論証は、対象全体の表象について語っていないという点でも知覚的現前の完全な説明としては不十分である。

そこで私は、知覚的現前を基礎づけるメカニズムを明らかにし、それに基づいてこの問題に答えることを目指す。これら三種類の表象とそれらの間の関係は、階層化された視覚システムとそれらの間の相互作用を重視する予測コーディング (例えば Hohwy 2013) によってより良く説明することができる。そのような枠組みによれば、対象の前面の表象は中間レベルに位置づけることができるのに対して、対象全体としての表象は階層化された知覚システムの比較的高次の階層に位置づけることができる。また、対象の背面の表象は、高次レベルに位置づけられる対象表象からの予測の結果として、前面の表象と同様に中間レベルに位置づけることができる。

この枠組みに基づいた説明が正しいとしたら、結局知覚的現前は知覚的だということになるのであろうか。この問題についての私の回答はむしろ改訂主義的である。知覚的現前はいかなる明白な種類の素朴心理学的な分類にも当てはまらない。すなわち、それは純粋に知覚的でもなければ純粋に認知的でもないような現象なのである。

参考文献

Hohwy, J. (2013). the Predictive Mind. Oxford, Oxford University Press.

Nanay, B. (2010). "Perception and imagination: amodal perception as mental imagery." Philosophical Studies **150**(2): 239-254.

Noë, A. (2002). "Is the visual world a grand illusion?" Journal of Consciousness Studies **9**(5-6): 5-6.

Noë, A. (2004). Action in perception, MIT press.

Noë, A. (2006). "Experience without the head." Perceptual experience: 411-433.

Prinz, J. J. (2012). The conscious brain, Oxford University Press, USA.